

# 批評家としての Poe の南部的特色について

江 口 裕 子

## 1. Poe の位置づけに関する諸説

Poe が世を去ってからすでに一世紀余が過ぎ、昨年 1959 年は彼の生誕百五十年であった。年が移り、世代があらたまるにつれて興亡するさまざまな文学上の運動や流派に属する文学者や、またその研究家が、Poe の作品のなかにそれぞれの文学の領域における胚種ともいふべき要素を見いだして、Poe にその文学伝統の祖という名をきせようとする傾向がある。フランスの象徴派の詩人 Baudelaire や Mallarmé にとっては、Poe はその象徴的な浪漫詩や、詩の原理によって、彼らの文学的理念に指標をあたえた師祖ともいふべき人であった。また、作品のプロットや効果の統一の理論を説いて、短篇小説の様式を確立したのも Poe であった。彼はまたたぐい稀れな推理の力を駆使してすぐれた探偵小説をのこしたが、推理小説、ミステリーなどさまざまに名称こそ変われ、このジャンルにおける元祖としての彼の地位は確乎として動かない。また、十八世紀末のヨーロッパに流行してのち、アメリカに発現し、その末流は現代のスリラー物にまで及ぶゴシック小説のアメリカにおける伝統の礎石をすえたのも Poe であったといえよう。また月世界への旅行や、天文学上の異変による世界絶滅の日を描いた Poe は科学的未来小説の遠祖とも見なされるであろうし、人間の異常心理にあざやかな分析のメスを加えた Poe は、近代の心理主義小説の系譜にも一役買っている筈である。

ことはどきように、Poe は近代文学の諸領域における可能性を萌芽の形にせよ、さまざまな variety で示した創造的頭脳であったといえる。にもかかわらず、Poe の文学を結局どの文学伝統に帰属させるべきか、特にアメリカ文学史のなかで、どこに Poe の座標をきめたらよいのかという結論を求める段になると生誕百五十年を経た今日になっても、なお Poe 研究家を当惑させるのである。Poe ははたして、考え得べきアメリカの文学伝統のどこにも定着することの出来ぬ作家なのであろうか？ 彼は、かつて Hamilton Mabie の指摘したように、時と所から完全に遊離して、突然アメリカの土壌に降ってわいたような前例を見たことのない存在なのであろうか？ “Misty mid region of Weir” を領土として、言葉の幻術をほしいままにした神秘的な

存在として片づけてよいのであろうか？

しかしながら、十九世紀後半までのアメリカ文学史家や、批評家の取扱ってきた Poe の伝統的な見方は、ほぼ如上の説に近かった。Blankenship は “A great weakness of Poe is his intellectual detachment from his environment.”<sup>1</sup> といい、Parrington は “Poe’s aloofness from his own Virginia world was complete. Aside from his art he had no philosophy and no program and no causes.”<sup>2</sup> といい、A. M. Schlesinger 教授は “Poe is a tragic and solitary genius, the Ishmael of letters, who shows no reflection of place or time in his work. . . .”<sup>3</sup> と述べているが、これらの意見はいずれも伝統的な見方を踏襲しており、その他 Lewis Mumford にしても、Poe を南部的背景の上に 鋭く浮び上らせた Van Wyck Brooks にしても、Poe の文学史上の位置づけについては尚困惑の表情を示し、従来考えられてきた国家的伝統のなかに彼を含めることは出来ぬと考えている。

このような Poe の見方に対して、この数十年来、Poe はかならずしもアメリカの土壌から逸脱し、孤立した作家ではなく、同時代のアメリカの社会的文化的な諸事情に対して、無関心どころか、多分に関心と反応を示し、また鋭い批評精神をもつてのぞんだ批評家であり、あるいはまた時の一般読者の好尚に投ずるような商業的ぬけ目なさをさえそなえた実務家としての Poe の一面を強調する考え方も現われて来ている。即ち、従来比較的無視されてきた Poe と、彼が生き且つ書いた十九世紀前半のアメリカの環境との関係を改めて検討し、彼をこの環境とは無縁の作家ではないと断じようとする見方である。この説を代表する学者には、Killis Campbell 教授をはじめとして、Harvey Allen、C. Alphonso Smith、George E. Woodberry、Ernest Merchand 等があげられ、また最近では Duke 大学の Jay B. Hubbell 教授の意見もこれに同調している。Harvard 大学の Howard M. Jones 教授も「Poe はアメリカの子である」<sup>4</sup> といい、従来の因習的な文学史のなかでの Poe の取扱いは不適當であり、一体文学史家が Poe のような特異な現象に出くわすときには、浅薄な分類は役に立たないという旨のことを述べているのは注目に値する。<sup>5</sup> これらの諸家は大なり小なり、Poe の南部人としての特色、南部の Poe への影響に言及して、彼を時代と環境の所産たることを免かれぬものと考えている。

Poe が 1835 年に T. W. White を輔佐して、*The Southern Literary Messenger* 誌の編集者となってから、1849年に生涯の幕を閉じるまでの十五年間にわたる magazinist としての経歴を考え、その間彼が内外の新刊書や定期刊行物にひろく目を通し、ヨーロッパ及びアメリカ国内の各種の新刊批評を試み、文学のみならず、政治、軍事、社会、文化、教育の諸問題や、新興科学にいたるまで広範囲な題目にわたって journalist としての関心と、批評家としての見識を示している点を考え、また一方、彼が自国の文学のあり方に対して高い批評基準をもっていて早くからアメリカ文学の英国依存を排して、アメリカ独自の権威のある文学をうち立てるため、

その中枢機関ともなるべき文学雑誌を主宰しようという念願をいただき、実際にも努力を試みてやまなかった野心のほどを考え合わせるとき、Poe の作品の非現実的要素にのみ注目して、彼を「時と所をこえた」孤立的な作家であると見なすことは「樹を見て森を見ぬ」あやまりをおかすことである。（ちなみに、この彼の宿願が現実には立脚しない、架空の夢想ではなく、当時の学界や文壇の有識者や、雑誌の編集者に、magazinist としての実際的経験にもとずき、きわめて具体的な計画と数字とを示して、くりかえして経済的援助と協力を求めている事実について、「Poe 伝記」において詳細な材料を提供している Quinn 教授の功績は大きい。）

なるほど、Poe が作品のなかに北部南部を通じてアメリカの歴史や伝統や、風物等をえがいたり、明示したりすることはほとんどなく、またアメリカ固有の民話伝説に取材することもなく、物語の背景にも、人物にも、事件にもアメリカの要素が稀薄であることは事実である。もし、その国の地方色や、歴史や国民をのみ克明に描くのが国家的作家であるならば、まさしく Poe は文学上の無国籍者である。それよりは寧ろ、彼がどの程度に時代の傾向に敏感に反応し、自己の中に消化して、それをいかに文学的形態のなかに開花させたかという点が大切なのではないだろうか？ Poe が日常的身近な題材をさけて、「はるかなる国、遠い昔」の特異な題材をえらび、作者自身の顔を生地のままさらけ出すことを好まなかったことは、彼が当時アメリカ国土に滲透しつつあった浪漫主義の空気を呼吸した時代の子であり、当時にはめずらしい芸術的工匠であったことを物語るものである。そしてまた意識的にアメリカの現実とは疎縁な題材をえらんだことについて、彼はちゃんと *Marginalia* のなかで説明をあたえているのである。即ち、アメリカ人がアメリカ的題材に立てこもるということは、文学的というよりはむしろ政治的な考えであり、「距離は視野に魅力をあたえる」が故に、純粹に文学的な見地からいえば異国の題材の方がのぞましい。世界全体を舞台として作品を書くことは、芸術家に許された自由であるという信念を披瀝しているのである。彼は、アメリカの作家があやまった国家意識から自国の題材に固執する結果 provincialism に陥いることをのぞまず、真の文学の国家性はそのような観点から考えられるべきではなく、先ず英国への追従を止めて自国に党派にかたよらぬ権威ある批評基準を確立し、すぐれた文学的人材を育成して自給自足の文学を発展させる、という意味での国家性こそ肝要であるという大乗的立場をとっていたのである。従って Poe がアメリカを描かぬということは必ずしも彼が自国の現状に無関心であったということの証拠にはならない。それはかえって、偏狭な愛国心や、徒党心から独立して、純文学的見地に立った Poe の、自国文学に対する目ざめた批評精神によって裏づけされていたのであった。

Van Wyck Brooks が Poe をアメリカの文学伝統の疎外者であるというとき、その伝統とは、Poe が終始対立した New England の文学を中核とした伝統を意味する。少なくとも二十世紀以前のアメリカ文学の主流は New England 文学にその源泉をもっていた。しかも従来の文

学史の大半は北部出身の学者によって書かれ、彼らはこの流れをアメリカ文学の正統と見なし、その他の地域の文学に見るべきものなしと評してきた。Poe は当時南部の地盤によって頭角をあらわし、北部の文人批評家の注目をひいたほとんど唯一の南部作家だったが、あの南部と北部の分裂のみぞの深まりつつあった時代に、とにかく北部の文壇その他の諸事情に対して反逆的な立場をとり、大胆辛辣な批評の筆をふるった Poe には特に風当たりがつよく、彼は全くこの New England に源をもつ文学伝統からしめ出されてしまった。このことが Poe はアメリカ文学史上の孤児であるという印象を助長してきたのだが、二十世紀以降、作家としてのみならず、批評家また magazinist としての Poe のより多面的な研究がすすめられる一方、アメリカ文学そのものも Poe 時代の局地的な文学から国際的文学の水準にまで発展してきている今日では、アメリカ文学を形づくる伝統についても、より国際的な立場から検討される余地があり、従ってアメリカ文学史上の Poe の位置も別な角度から見直すことが出来るのではないかと思う。

今、ここで私が試みたいと思うことは、Poe がアメリカの環境から無縁の作家ではないという立場から Campbell 教授や Hubbell 教授の説に同意して、Poe と同時代のアメリカ、特に南部の環境との関係を考え、Poe が時代と環境の子としてどのような反応を示したかを考察することであり、この中では主として Poe の気質的なものや、社会的見解を取扱うつもりである。このためには Poe の詩や散文によるより、当代の journalist、また批評家としての Poe の著述、即ち批評、随筆、書簡などに拠った方がより近道であろう。

## 2. Poe の南部人氣質——「南部紳士」の観念

Poe が生れたのは北部 Boston であるが、彼が青少年期を送り、また文学的地盤として作家時代の大半をすごしたのは南部の Richmond であり、Baltimore であり、Charleston であり、Philadelphia であった。Harvey Allen は「北部の批評家は Poe が南部で育った南部人であることを忘れていたようだ」といっているが、伝記に従えば、Poe は出生地 Boston に愛着を抱いたことはなく、後年は Boston を “Frogpondium” とそしるほどであったのに反し、生涯を通じて自分を南部 Virginia 人であると称して、それに誇りを抱いていた。また Poe に親しく接した人々、たとえば J. P. Kennedy、G. Graham、N. P. Willis、Mrs. Weiss、Mrs. Whitman 等の証言によれば、彼らが Poe の人物、風采、態度、言葉づかいなどから、典型的な「紳士」であるという印象をうけたことはよく知られている。たとえば Willis は 1840 年代の Poe の人物を描写して “. . . a quiet, patient, industrious, and most gentlemanly person, commanding the utmost respect and good feeling by his unvarying deportment and ability.”<sup>6</sup> といっているし、Mrs. Weiss は、1849 年七月、Richmond 市の郊外

にある同夫人（当時まだ少女であったが）の家を訪れた Poe の印象を次のように語っている。

At sight of him, the impression produced upon me was of a refined, high-bred and chivalrous gentleman. I use this word “chivalrous” as exactly descriptive of something in his whole *personnel*, distinct from either polish or high-breeding, and which, though instantly apparent, was yet an effect too subtle to be described.<sup>7</sup>

この印象記のなかで Poe に与えられている gentlemanly person とか、chivalrous gentleman という言葉は、アルコールに毒されぬ限り、しらふの Poe にきせるにはもっともふさわしい形容詞だったにちがいないし、また Poe 自身にも多分に gentleman たらんとする pose があったのだと思う。

南北戦争以前の plantation たけなわであった頃の南部社会の人々、特に支配階級、特権階級であった planter たちの間には「南部紳士」Southern gentleman といわれる伝統的な観念が育ってきていたが、それは彼らが誇りとし、そうありたいと望む理想的な人間像に対する名称であった。「南部紳士」とは何を意味していたのであろうか？

一体に、大農園組織と奴隷制度の基礎の上に築かれた旧南部の生活では、商工業経済によってまかなわれる北部とは大いにことなっていた風俗習慣や、土地の気風が培かれたのは当然であるが、そのなかで伝統的な南部の精神を形づくるものの一つとして、この「南部紳士」の観念を除外することは出来ないであろう。この伝統は Virginia では特につよかったから「ヴァージニア紳士」という名称で呼ばれてもいる。十七世紀に Virginia に住み着いた移住民たちは、英本国の田園生活の様式を植民地に移し植えたが、plantation の制度が確立し、ニグロの農奴の数が増すにつれて、農園主は一地方を支配する領主にも似た富と権力を獲得するにいたった。彼らはみな英本国の大地主 country gentleman を模範として、生活様式、風俗習慣、礼儀作法、教育等すべて本国の例にならい、貴族的な支配階級として使用人にのぞむ資格を身につけることに努力した。農園主の子弟たちは Oxford、Cambridge、Edinburgh 等の大学に送られて教育を受けた。こうした階級の人々の特権意識がおのずと「南部紳士」、または「ヴァージニア紳士」の観念を生むことになったのであるが、この紳士の資格が何であったかという、土地財産や社会的地位を所有することはいうまでもなく、ひろい学問教養、特に古典的教養を身につけた、洗練された趣味の持ち主であること、また各種のスポーツや遊芸にも心得があることを必要とする。また名誉を重んじ、信義の念に厚く、隣人に対しては誠実、客人に対しては款待の念をもってむかえ、目下の者には恩顧をあたえ、女性には礼儀をもって接しなくてはならぬ。このような個人の名誉と礼節を強調する「南部紳士」の理想は勿論、中世の騎士道精神に相通じるものがあるのだが、広大な土地と多数のニグロ奴隷を所有する planter たちは、いつか中世の封建貴族の生

活と、自分らのそれを同一視するような illusion を抱きかねなかった。この「南部紳士」の伝統が十九世紀に入ると、ヨーロッパの浪漫主義のもたらした中世趣味と結びついて、南部特有の騎士道崇拜の気風が発達することとなった。南北戦争以前の Virginia で中世風の騎馬試合<sup>トーナメント</sup>が盛に行われたのも、当時の中世趣味を物語る一例であろう。そして、さらにこの気風は、南部特有の女性崇拜、礼儀作法の重視、軍人氣質、ひいては国家主義などの傾向を培かう原動力となったのである。

この Virginia の首都 Richmond は当時東部海岸ではもっとも貴族的な都市の一つであり、また南部文化の中心地でもあった。Poe が母親の Elizabeth Poe と死別して、Allan 家に引き取られた時（1811 年）から、英国 ですごした五年をのぞいて、養父と決裂して家を出奔する（1826 年）までの多感な少年期をすごしたのはこの Richmond であり、Poe はこの時期に「南部紳士」の矜持と、生活習慣を培かわれたものと見て差支えない。Poe を引き取った煙草商人 Allan 家の家運は当時隆盛の道をたどっていて、Richmond でも上流階級に属する富裕な家であり、養母の Frances は小農園主の遺児であった。Poe が南部の貴族的階級の伝統に親しくふれ、「南部紳士」の身だしなみを養なわれたのは主として養母と、その妹にあたる Anne Valentine の影響によるものと推定される。

さらに、Poe が 1826 年に入学した Virginia 大学は、その前年 Jefferson が民主主義の教育理想にもとづいて創立し、当時盛であった landscape gardening に従って彼自身が設計した、美しい庭園風のキャンパスをもった大学であるが、学生の大半は Virginia の上流階級の子弟であった。しかし「個人の精神と行為の自由」を尚ぶ Jefferson の理想はいまだ精神的訓練を十分に受けていない、自由奔放で、享樂的で、浪費好きな南部貴族の子弟たちの無分別に拍車をかける結果となり、さまざまな学校騒動をひきおこしさえした。自伝的要素の多い William Wilson の中には、この頃の放埒な学生生活の一端が描かれているが、Poe がこうした環境のなかで知的教養のみならず、南部貴族の子弟らの気質にもふれ、また奔放不羈な生活習慣に馴れ親しんだことは想像にかたくない。しかし Poe は不幸にして Allan 家と決別して、名実ともに南部紳士となる資格を失ったわけであるが、このことは彼の自尊心を傷つけることはなほだしく、かえって終生この観念に固執させる結果となった。彼は幼少時から貴族的な生活風習のなかに人となりながら、つねに自分はしがない旅芸人の子であるという屈辱感と劣等感とから解放されることがなかったが、長じてのちもこのような complex が、彼が「南部紳士」としての自負心をすてきれず、終生貴族主義者として、よかれあしかれ衆愚をへいげいする気概を持ちつづけた原動力になっていたのであろう。Poe が Boston で生れたことは伏せて、“I am a Virginian, at least I call myself one, for I have resided all my life, until within the last few years, in Richmond.”<sup>8</sup> といい、くりかえして Virginia 人であると注意を喚起している言葉

の背後には、以上のような社会的伝統をふまえた Poe の自負心がひそんでいたのである。

次に Poe が女性に対して騎士的な礼儀をもって接し、女性を憧憬してつねに精神的な支柱を求めてやまなかったことは周知の事実である。彼は「詩の原理」*The Poetic Principle* の中でもっとも詩的感興をさそうものの一つとして、女性の美と愛とに最高の地位をあたえ、随喜渴仰の涙を流さんばかりに賞揚している。

He feels it in the beauty of woman—in the grace of her step—in the lustre of her eye—in the melody of her voice—in her soft laughter—in her sigh—in the harmony of the rustling of her robes. He deeply feels it in her winning endearments—in her burning enthusiasms—in her gentle charities—in her meek and devotional endurances—but above all—ah, far above all—he kneels to it—he worships it in the faith, in the purity, in the strength, in the altogether divine majesty—of her *love*.<sup>9</sup>

実生活においても彼は女性の愛護なしには生きてゆけぬタイプの男性であったから、生涯をとおして、彼の心の上に愛の烙印を残して去った女性の数も多く、Poe の幼少時に世を去った生母 Elizabeth Poe をはじめ、Jane S. Stanard、養母 Frances Allan、少年時代の愛人 Elmira Royster、稚な妻の Virginia、彼女の死後は Mrs. Whitman、Annie Richmond など Poe の女性讃歌の靈感となったが故に今日その名を留めている女性も一人二人にはとどまらない。批評家としての Poe は同性に対しては、時に狂犬のように見境もなく噛みついたが、女流詩人に対しては「ほめ得るときには語るべし。さもなくば沈黙せよ」というモットーで、凡庸詩人に対しても過分な讃辞をつらね、騎士ぶりを発揮した。従って女流詩人や女友だちには人気があり、Poe が同性から見すてられる時があっても、彼を賞讃し、擁護する女性にはこと欠かなかった。

このような Poe の女性讃美や、女性について語るときの、些か大げさな詠歎的な口調は Poe のみならず、旧南部人の女性に言及した文章のなかにしばしば見出されるのである。このように女性への浪漫的憧憬はむしろ当時の南部一般のものであり、前述したような「南部紳士」の理想と結びついた騎士道崇拜の風潮から派生してきたものと考えられるであろう。旧南部では一般に家庭における主婦の地位はきわめて高かった。これは実際問題として plantation という生活形態から必然的に生じた結果であり、奴隷制度もこれに一役買っているのである。即ち各自が広大な土地を所有する planter の生活は、いきおい隣人から互いに孤立した状態におかれるが、このように閉鎖された環境の中心となって主要な役割を果すのは家庭であり、また緊密な家族的紐帯である。従って家族に快楽と慰安をあたえることを務めとする主婦が名誉ある地位と敬意を勝ち得たのは当然であった。これに加えて多数の奴隷を擁するほど、女性は家事労働に束縛されることが少なく、閑暇を利用して教養を身につけ、芸能の腕をみがくことも出来、一旦社交の場に立

ち混われれば、男性と対等の立場で語り、そしてまた男性の憧憬の対象として、衆目をあつめることも出来たのである。このような特殊な plantation と奴隷制度の伝統のなかで女性が榮譽ある座をしめていることについて W.J. Cash が、南部の家庭生活でニグロの女奴隷を犯す夫の罪の complex に原因を帰しているのは警拔な解釈だが、彼は “The upshot, in this land of spreading notions of chivalry, was downright gyneolatry.” といい、“She was the South’s Palladium, this Southern woman — the shield-bearing Athena gleaming whitely in the clouds, the standard for its rallying, the mystic symbol of its nationality in face of the foe. She was the lily-pure maid of Astolat and the hunting goddess of the Boeotian hill. And—she was the pitiful Mother of God. Merely to mention her was to send strong men into tears—or shouts. There was hardly a sermon that did not begin and end with tributes in her honor, hardly a brave speech that did not open and close with the clashing of shields and the flourishing of swords for her glory. At the last, I verily believe, the ranks of the Confederacy went rolling into battle in the misty conviction that it was wholly for her that they fought.”<sup>10</sup> と述べているのは、いささか誇張のきらいはあるとしても、南部の女性偶像視の風潮をよく伝えている。

Poe の女性観も上のような、浪漫的で多分に sentimental でもある南部一般の女性観と異質のものではなかった。しかも、女性の社会的地位とか、活動という面では典型的に因習的な南部人の見解の域を出なかった。1835 年の *The Southern Literary Messenger* 誌の批評のなかで、女子教育に言及して、

The business of female education with us, is not to qualify a woman to be the head of a literary *coterie*, nor to figure in the journal of a travelling coxcomb. We prepare her, as a wife, to make the home of a good, and wise, and great man, the happiest place to him on earth. We prepare her, as a mother, to form her son to walk in his father’s steps, and in turn, to take his place among the good, and wise and great.... Her praise is found in the happiness of her husband, and in the virtues and honors of her son.<sup>11</sup>

といい切っているのを見れば、彼が女性にもとめていた理想はあくまで家庭的で、夫や子供に献身的で、貞淑な、良妻賢母型であって、事実社会改革運動に身を投じて、男性なみに活躍する青鞥派女性はいさしばしば Poe の辛辣な批評を蒙っている。してみると Poe の女性尊重はいわゆる男女同権論者のそれではなく、どこまでも古風で保守的で、中世的な女性崇拜につながるものであった。Virginia の社会学者 George Fitzhugh が「女性が神経質で、気まぐれで、か弱く、



たよりなげである限り、われわれ男性は彼女を讃美し崇拜する……われわれは男性化した青鞥派女性に引き廻されるより、病弱な女性をいたわる方をかぎりなく好む」<sup>12</sup> といっているのは、当時の南部人の女性の好みをかなり正直に反映した意見であって、Poe が実生活でも、学識や頭脳性を女性のなかに求めるより、むしろ優美纖弱で、たよりなげで、愛情一途な Virginia のような女性を妻として熱愛したことを思い合わせれば、Poe の女性、結婚、家庭に関する見解は、素朴で、保守的かつ浪漫的な南部一般の考えの域を出るものではなかったと見ても差支えない。

### 3. 政治社会の動向に関する Poe の見解

Poe は当時の社会情勢や、政治の動向に対してどのような立場をとっていたであろうか？

十九世紀前半のアメリカは論争の喧々ごうごうたる時代であり、その論議の中心となったのは democracy であり、諸種の社会改革運動であり、また進歩の観念であった。そして、労働、法律、学校制度等の改善、奴隷解放運動、婦人参政権運動、禁酒運動、さては服装や食事にといたるまで、あらゆる分野における既成の制度慣習に改革論者たちの検討のメスがふるわれた。これらの急進的な改革運動の温床となったのは北部、特に New England であった。結論から先にいえば、Poe はこれらの動きに対して終始不信と懷疑をもったのぞみ、democracy に対してもしばしば嫌厭の意志表示をしている点では Irving や Cooper などと共に、彼を保守的思想家の陣営に加えざるを得ない。Poe は Jefferson が人間の基本的自由と、教育による人間完成の可能性への信念にもとづいて創立した革新的な学園、Virginia 大学に学んだことは前にのべたが、Poe はおそらく学長であった Jefferson と校内で顔を合せたこともあろうし、また習慣に従って Monticello にある彼の邸宅に招かれて食事を共にしたこともあったかも知れない。しかし Jefferson の democracy の理想は幸か不幸か、若き Poe の心に滲透することはなく、後年かえって democracy に背を向ける態度をとるにいたったのは皮肉な結果といわねばならない。Poe の青年期の思想を培ったのは Jefferson ではなく、彼は同じ Virginia 出身でも Federalist 系の John Marshall を崇拜した。1830 年代から 40 年代の Richmond の政治的傾向は Whig 党支持であり、保守的特権的階級を攻撃する民主党の Jackson には反対の機運がつよかった。Poe の政治的色彩はあまり明らかではないが、どちらかといえば Whig 党の肩を持っていた点では、土地の一般的傾向に順応していたものと見なしてよい。実際問題として、Poe は政治の腐敗墮落をもたらす政治家や、役人のやり口に対して、常に憤懣を抱いており、政治ぎらいを表明せざるを得なかった。たとえば 1844 年、New York に住んでいた Poe は *The Columbia Spy* 誌に送った手紙の中で、市街の清掃がなござりにされ、またある地区が半月以上の間も、点燈夫の公務怠慢のために暗黒のまま放置されているというような事態があ

まりにも寛容に看過されていることを指摘して “When the question is asked—‘cannot these scoundrels be made to suffer for their high-handed peculations?’—the reply is invariably — ‘oh, no—to be sure not—the thing is expected, and will only be laughed at as an excellent practical joke. The comers-in to office will be in too high glee to be severe, and as for the turned-out, it is no longer any business of theirs.’ ”<sup>13</sup> と慨嘆している。

彼は生涯のある時期に、政府の役人になる運動をしたことがあるが、その時の挫折も、彼の政治ぎらいを助長する原因となったと考えられる。1841年の五月、Poe の誠実な友人の一人であった F.W. Thomas が Poe の貧困を見かねて、役人になるようにすすめたことがあった。ちょうど Whig 党の推した大統領 Harrison が就任後一月で死去し、John Tyler が昇任した直後のことで、Thomas 自身も Harrison の縁故で Washington で官職を得ていたが、朝九時に出勤して、午後二時には退庁出来るという、閑な役所づとめの有様をつたえて、著述生活をするにはもってこいの職だと、色々有利な条件を書きおくれた。当時 Philadelphia で病妻をかかえて難渋していた Poe はこの申し出には大分食指が動いたらしく、早速職をあっせんしてくれるように依頼の手紙を出している。そのなかで、“Would to God, I could do as you have done! Do you seriously think that an application on my part to Tyler would have a good results?....My political principles have always been, as nearly as may be, with the existing administration, and I battled with right good will for Harrison when opportunity offered.... Have I any chance?”....<sup>14</sup> と、いかにも熱心な Harrison の支持者であるかのように書いているが、就職運動の手紙のことでもあり、誇張癖のある Poe のこととて、果して彼がどれほど熱心な Whig であったか真偽のほどは明らかではない。ただ Poe の役人志願も政治色、徒党の問題よりも、芸術的労作を生活のため切り売りしなければならぬような現状がたえがたかったことが原因であったことだけは事実である。彼が就職運動のために Washington にくるようにと要請する Thomas の手紙にこたえて、次のように言っていることから明らかである。

I wish to God I could visit Washington, but—the old story you know—I have no money; not enough to take me there, to say nothing of getting back. It is hard to be poor, but as I am kept so by an honest motive I dare not complain.... I would be glad to get almost any appointment, even a \$500.00 one, so that I have something independent of letters for a subsistence. To coin one’s brain into silver, at the nod of a master, is, to my thinking, the hardest task in the world....<sup>15</sup>

この就職運動はそれから二年後までつづいたが、Thomas は依然として Poe のため官吏への道をひらくための労力を惜しまず、Philadelphia の税関に就職口をあっせんし、Poe 自身もたびたび役所に足を運んだにも拘らず、Smith という悪質な取税官の策謀のために、Poe は他人にこの職を奪われる破目となり、ていよくあしらわれて追い帰された。その後 Thomas その他の友人の好意で Poe は Washington を訪れ、大統領 Tyler にも面接する手筈が整えられた。がこの時は不幸にも例の酒癖がたたって、彼の官吏となる機会は永久に失われてしまった。この事件は Poe には痛恨事であったが、それ以来政治は彼にとっては一そうとましいものとなった。Poe と政治とはよくよく宿命的に性が合わなかったらしく、それから数年後、彼が Baltimore で謎の客死を遂げたのは、折柄行われていた国会議員の選挙の投票場のそばであり、その死因にも悪質な院外団の連中のために当時珍しくなかった監禁政策 *cooping* の犠牲となったと思われる節があるからである。

知的貴族主義者をもって認じた Poe はまた徹底した個人主義者であった。従って個人性の発達、個人の独自性、尊厳性をそこなうと考えたものに対しては痛烈に排撃するのがつねであった。個人主義は南部では *plantation* 制度が根を下した初期の頃から、それと結びついて発達してきた南部固有の精神の一つであり、Poe の時代でも、個人性の発達ということは極度に固執されていた。この精神を生じた源泉を探ねて見ると、植民の初期の頃、人口密度の少い、無制限といってもよいほどの広大な土地に定着して、原始的な開拓生活をはじめた移住民たちは既成の法律や道德等、一切の社会的羈絆に束縛されることもなく、すべての行動の基準を自分自身に求めるほかはなかった。この状態は *plantation* 制度が確立したのちも持続され、*planter* たちは彼らの家族や奴隷とともに住むほかは、他の農園からは比較的孤立した状態におかれ、彼自身の農園区域は自給自足の独立した一つの社会的単位を形成するにいたった。そして、彼自身は一国一城の君主のような地位をしめて、彼の意志は家の子郎党にとっては至上命令となった。このことは大農園主のみならず、貧農にいたるまで同様であり、彼らは小さいながら自分の土地の所有権を固守して、独立自存の状態を保つことにつとめた。その結果、個人意識はきわめて強大となり、個人の独立性、個人の権利等が極度に重要視される伝統を生むにいたった。そして既に確立された社会組織に必要な程度をこえるいかなる政治的、法的権威に対しても、不信の態度をもって臨む傾向をも生じたのである。南部において、政治的統制が北部に比べて遅々として進まなかったのも、このようないわば原始的で素朴な個人主義意識が強大に発達してきていたことにも原因があるのである。

Poe のすべての主義見解をつらぬいているものは貴族的な個人主義であるが、これは今述べたような南部の精神的地盤の伝統のなかで育った人間として当然であると考えられよう。かてて加

えて Poe には烈しい天才意識があった。従って個人の才能、創意、優秀性に関しては敬意と共感をもって語る一方、無知で愚昧な人間には容赦のない軽侮を示した。彼が democracy や、諸々の社会改革運動に対して反感を抱いたのは、それらは知的精神的に愚鈍な多数者が、優秀な少数者を征服する力をあたえることに外ならぬという見解にもとづくものであった。彼は *Marginalia* の中で “The modern reformist philosophy... annihilates the individual by way of aiding the mass...”<sup>16</sup> と述べ、Lowell への手紙のなかでも、“I cannot agree to lose sight of man the individual in man the mass.”<sup>17</sup> と彼の見解を明らかにしており、無知な大衆のことを mob と呼んで、不必要なまでの毒舌をふるって嫌厭の情を示している。彼の democracy や改革運動に対する不信は *Some Words with a Mummy, Melonta Tauta, The Colloquy of Monos and Una* その他諸所に見出されるが、*Some Words with a Mummy* は時の社会政治の動きに対する痛烈な諷刺作品であり、このなかでは何千年も前に死んだエジプト貴族のミイラを生き返らせ、democracy について次のように語らせている。

We then spoke of the great beauty and importance of Democracy and were at much trouble in impressing the Count with a due sense of the advantages we enjoyed in living where there was suffrage *ad libitum*, and no king.

He listened with marked interest, and in fact seemed not a little amused. When we had done, he said, that, a great while ago, there had occurred something of a very similar sort. Thirteen Egyptian provinces determined all at once to be free, and to set a magnificent example to the rest of mankind. They assembled their wise men, and concocted the most ingenious constitution it is possible to conceive. For a while they managed remarkably well; only their habit of bragging was prodigious. The thing ended, however, in the consolidation of the thirteen states, with some fifteen or twenty others, in the most odious and insupportable despotism that was ever heard of upon the face of the Earth.

I asked what was the name of the usurping tyrant.

As well as the Count could recollect, it was *Mob*.<sup>18</sup>

このような Poe の見解からすれば、当時北部で大きな影響をあたえていた Bentham や Mill の「最大多数の最大幸福」を標榜する功利主義説にしても、個人よりも社会人としての人間に重点をおくという点で、彼とは相容れぬ思想であったし、同様に Carlyle の英雄崇拜の思想をも、“No hero-worshipper can possess anything within himself. That man is no man who stands in awe of his fellowman.”<sup>19</sup> と軽蔑せずにはおれなかった。

また、彼は Lowell や Emerson ら北部の思想家が信奉していた人間の完全性や人間社会の進歩の観念というような楽天的な考えに同調し得ず、Lowell にあてた手紙のなかで

I have no faith in human perfectibility. I think that human exertion will have no appreciable effect upon humanity. Man is now only more active—not more happy—nor more wise, than he was 6000 years ago. The result will never vary—and to suppose that it will, is to suppose that the foregone man has lived in vain—that the foregone time is but the rudiment of the future—that the myriads who have perished have not been upon equal footing with ourselves—nor are we with our posterity.<sup>20</sup>

と不信の意を表しており、*Some Words with a Mummy* の中でも、エジプト貴族のミイラをして、“.... Great Movements were awfully common things in his day, and as for Progress, it was at one time quite a nuisance, but it never progressed.”<sup>21</sup> と言わせている。彼は技術社会や、物質文明の未来の変遷について、時におどろくほどの予言者的な洞察力をもって、balloon による地球脱出を想像したり、Manhattan に摩天楼の建つことを予見したりしているが、彼はいわゆる“進歩”ということが人間社会にもたらす利益や幸福については決して楽観的ではなく、むしろそれに比例して増す社会悪や不幸を見のがし得なかったのである。当時の南部の雑誌にこうした Poe の悲観説を支持するような類似の論説の見出されることは、北部に対して批判的であった南部の論調を示すものとして興味ふかい。

The doctrine of perfectibility was a dream of the last century; it is a folly in this.... Man remains essentially the same throughout the shifting career in which he is exhibited by history.... Optimism of any kind is always a mark of intellectual imbecility.<sup>22</sup>

社会改革運動の一端として北部に盛んであった女権拡張運動についてはどうであったかというに、Poe は前述したように、南部に伝統的な、保守的で素朴な女性観をもち、女性は家庭内で夫を安楽にさせ、よき子を育てるのが最善の道であるというような考え方をしていたから、社会運動に奔走するような進歩的女性は Poe の好むタイプではなく、女権拡張運動に対しても、男女の性別は神の計画によって定められたもの故、これを無視することは社会の秩序をみだすものだという見地から反感を抱いた。女性をもって優美さと愛情の権化とみなした Poe は、中性化した逞ましい青鞥派女性には、何らの魅力も感じなかったらしく、“Our ‘blues’ are increasing in number at a great rate; and should be decimated; at the very least. Have we no critic with nerve enough to hang a dozen or two of them, *in terrorem*? ....”<sup>23</sup> と酷評している。これらの青鞥派女性のなかでも、もっとも Poe の辛辣な批評の対象となった

のは Margaret Fuller であり、女流文人についてめったに悪口をいわない Poe も彼女の著書「十九世紀の女性」*Woman in the Nineteenth Century* のことを “In the way of independence, of unmitigated radicalism, it is one of the ‘Curiosities of American Literature,’ and Doctor Griswold should include it in his book.”<sup>24</sup> と皮肉っており、Thomas にあてた手紙のなかでは “that detestable old maid”<sup>25</sup> という気の毒な形容詞をきせて呼んでいる。

奴隷解放運動は、北部の人道主義者らによって始められ、1830年代には南部をのぞいて全国的に発展しつつあったが、Poe は奴隷制度に対して擁護の立場をとっている。1836 年 James Paulding の *Slavery in the United States* の書評が *The Messenger* 誌上に載せられたが、これは書評というより、むしろ奴隷制度に対する主観的抒情的な気持の発露ともいえるべきもので、南部の家庭で主人につかえるニグロの忠誠と、それにこたえる主人の温情について語り、両者の間に通う道徳的感情を強調して、奴隷制度を擁護した一文である。この手記はおそらく南部の生活で直接ニグロの召使いに接して、彼らの気質、言語、習慣になれ親しんだものが、北部の人々の考えるような観念的な人間関係ではなく、体験をとおして奴隷制度のよい面について語ったものであり、従来は Poe の批評と考えられてきたが、Hubbell 教授はこれを Beverly Tucker の書いたものとして、これを Virginia 版全集中に含めた Harrison 教授の誤謬として訂正している。今真偽のほどをたしかめる術はないが、万一そうだとすると、*Fable for Critics* の書評のなかで Lowell のことを “Mr. Lowell is one of the most rabid of the Abolition fanatics; and no Southerner who does not wish to be insulted, and at the same time revolted by a bigotry the most obstinately blind and deaf, should ever touch a volume by this author. His fanaticism about slavery is a mere local outbreak of the same innate wrong-headedness which, if he owned slaves, would manifest itself in atrocious ill-treatment of them, with murder of any abolitionist who should endeavor to set them free. A fanatic of Mr. L.’s species, is simply a fanatic for the sake of fanaticism, and *must* be a fanatic in whatever circumstances you place him.”<sup>26</sup> ととき下している筆先の痛烈さを見れば、Poe が奴隷廃止論者に対して偏見といってもよいほどの反感を抱いていたことが察せられるであろう。

次に、Poe は科学の進歩、機械の発明、それにともなう工業主義の発展、物質文明の進歩に対して、どのような見解をもっていたか？ Poe がすぐれた科学的頭脳の持主であったことは周知の事実であるが、従って彼は生涯を通じて科学に強い関心を示し、多くの科学者の著作も読んでおり、形而上学、天文学、数学、物理学、また当時盛んであった骨相学、催眠術など新興の擬似科学にいたるまで貪婪な知識欲を示している。これらは彼の作品にも数多の材料やアイディア

を提供しており、遂には *Eureka* のごとき著作を生むことにもなった。実際、Poe はアメリカの文学者の中では科学によって想像力を刺戟された最初の作家だったといえるであろう。しかし彼は、科学上の発明発見や、機械の発達が人間生活に及ぼす実際上の結果については、多くの害悪をみとめずにはおれなかった。初期の詩 *AL Aaraaf* の序詩として書いた sonnet はあきらかに彼の科学に対する抗議であった。Poe はこの詩のなかで、科学の現実を観察する眼は、詩人の想像を損ない、さまたげるものであるが、詩的真実は科学のそれにまさるものだということを暗示しているが、さらに *AL Aaraaf* のなかでも、この題目に言及して、

Ev'n with *us* the breath

Of science dims the mirror of our joy;<sup>27</sup>

と詠っており、*The Colloquy of Monos and Una* のなかでは、未来の地球上の生活をえがいて、機械の生産にとまなう工業資本主義や物質文明が自然の美をそこない、人々が物質的利益を追い求めて、精神性を失う害悪に言及している。彼が Bentham や Mill の功利主義に反感を抱いていたのは一つにはこれを産業主義と結びついて勃興してきた中産階級の思想的武器と見なしたからでもあった。これと関連して Poe は、アメリカの物質万能主義や、ドル崇拜、金ピカ趣味の俗悪性をしばしば呪詛し、アメリカには “aristocracy of blood” というものはなく、これに代るものは “aristocracy of dollars” があるのみ、アメリカ人が富と物質を崇拜することは他の国に例を見ず、従って地球上のどの国にもまして貧乏人は軽蔑されねばならぬ国だと慨嘆している。Poe はこのような富の偏重や成金趣味こそアメリカの芸術の貧困、趣味の低下をもたらすものとして、この現状を軽蔑もし、憂れいもしていたのである。科学の振興にとまなう機械の発達、経済機構の工業資本化、都市の増大、金権主義の伸長、ドルの獲得競争、これらの趨勢は北部を中心に着々と進んでいたのであるが、こうした情勢に向けられた Poe の不信や疑惑は、精神的貴族主義者として、また清貧に甘んずる芸術家として当然の感情であったにちがいないが、その感情のなかには plantation 制度と奴隷経済の地盤の上に生活してきた南部人の、既成の社会制度や経済組織をともしればくつがえそうとする北部の勢力に対する反抗意識が反映していたとも考えられるのである。

前述したように Poe は南部の planter の伝統のなかで育ち、Virginia 紳士を pose して、伝統に培かれた優越者の意識を終生失わなかった。彼の激すれば傲岸無礼に流れやすい気位の高さ、cavalier ぶりの動作物ごし、熱狂的な空想癖、女性への sentimentalism、友人知己に対する信義の厚さや、彼にたよった家族たちに報いる恩愛のふかさ、それらはあきらかに南部人気質の一つの型を示している。また社会批評家としての Poe が Jackson 派の民主主義に対する不信、超絶主義や、また Brook Farm や New Harmony による新協同社会の建設運動、その他の社会改革運動、また工業資本主義に対する否定的な見解、奴隷制度の擁護、それらは Poe

が意識するとしないとにかかわらず、彼が自分の出生地であり、自分の身分の所属すると見なした南部の有産階級、特権階級が北部の進歩的な政治や社会の動向に対してつねに防禦と警戒の態勢をとり、昔ながらの南部の社会秩序への脅威と侮辱であると見なした態度と一致しているとはいえないであろうか？

以上のように Poe の気質や見解には南部人らしい特色は色々挙げられるが、唯注意すべきことは Poe がたとえ南部擁護の立場をとったにせよ、決して南部一辺倒の sectionalist ではなく、いわば南部人でありながら南部をこえた作家であり、批評家であったということを忘れるべきではない。作家としての Poe は特に南部の自然や歴史をえがくことにつとめたこともなく、plantation の伝統や、南部の文化に栄光をあたえて、土地の読者の人気を勝ち得ることに無関心であった。また彼が南部の局地的な偏狭さや、文化的蒙昧を容赦なく指弾したことは、北部文人の偏見や独断を責めてはばからなかったのと同様であった。またそれと反対に Hawthorn や Lowell や Longfellow への評価のように、北部の文人といえども長所をみとめたときにはこれを賞讃するのにやぶさかではなかったのである。いわば Poe は局地的な南部にも北部にも属さないで、「世界を舞台として」という抱負のもとに世界的水準で物を考え、また作品を書いていた作家といえるであろう。従ってこの小論で私のいいたかったことは、Poe が時と所に無縁な作家であるという説に反対する立場から、おそらく Poe 自身も意識していなかったであろうが、社会また文明批評家としての Poe の見解を色づけている南部社会の影響を無視することは出来ぬということであり、Poe を南部作家として定着することではないのである。

附記 この小論は「Poe の東洋的要素について」の予備的研究として書かれたものであることをおことわり致します。



- 1) Blankenship, *American Literature as an Expression of the National Mind*, Henry Holt, New York, 1931. p. 217.
- 2) Parrington, *Main Currents in American Thought*, Harcourt, Brace, New York, 1927. Vol. II, p. 55.
- 3) Schlesinger, *New Viewpoints in American History*, Macmillan, New York, 1922. p. 211.
- 4) Introduction to *Poems of Edgar Allan Poe* by H.M. Jones, The Spiral Press, New York, 1929. p. V.
- 5) Jones, *American and French Culture*, Chapel Hill, N.C., 1927. p. 6.
- 6) Willis, N.P., "The Death of Edgar A. Poe", *Home Journal*, Oct. 20, 1849.
- 7) Weiss, Susan A.T., "The Last Days of Edgar A. Poe", *Scribner's Monthly*, XV, March, 1878. p. 708.
- 8) Letter to F.W. Thomas, June 26, 1841. Original Autograph Ms., Anthony Collection, New York Public Library.
- 9) Poe, Works, XIV, p. 291.
- 10) Cash, W.J., *The Mind of the South*, Alfred A. Knopf, New York, 1941. pp. 85—86.
- 11) Works, VIII, p. 44.
- 12) Fitzhugh, George, *Sociology for the South*, Richmond, Va., 1854. pp. 213—220.
- 13) *Doings of Gotham*, Jacob E. Spannuth, Pottsville, Pa., 1929. pp. 31—32.
- 14) Letter to Thomas, June 26, 1841. Works, XVII, pp. 91—92.
- 15) Ibid., XVII, pp. 93—94.
- 16) Works, XVI, p. 170.
- 17) Letter to Lowell, July 2, 1844. Autograph Ms., Letter, Harvard College Library.
- 18) Works, VI, p. 136.
- 19) Works, XVI, p. 100.
- 20) Letter to Lowell, July 2, 1844.
- 21) Works, VI, p. 136.
- 22) A review of Herbert Spencer's *Social Statics*, the *Quarterly Review of the Southern Methodists*, April, 1856.
- 23) Works, XVI, pp. 173—174.
- 24) Works, XV, p. 74.
- 25) Letter to Thomas, February 14, 1849. Autograph Ms., Griswold Collection, Boston Public Library.
- 26) Works, XIII, pp. 171—172.
- 27) *Al Aaraaf*, Part II, 11. 163—164.

## 参 考 书 目

- The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. by James A. Harrison, 17 vols. New York, 1902.
- Doings of Gotham*. Jacob E. Spannuth, Pottsville, Pa., 1929.
- The Letters of Edgar Allan Poe*, ed. by John W. Ostrom, 2 vols., Cambridge, Mass., 1948.
- Allen, Harvey, *Israfel: The Life and Times of Edgar Allan Poe*, 2 vols. George H. Doran, New York, 1927.
- Campbell, Killis, *The Mind of Poe and Other Studies*, Harvard Univ. Press. Cambridge, Mass., 1933.
- Quinn, Arthur Hobson, *Edgar Allan Poe: A Critical Biography*, Appleton-Century-Crofts, New York, 1941.
- Blankenship, Russell, *American Literature as an Expression of the National Mind*, Henry Holt, New York, 1931.
- Brooks, Van Wyck, *The World of Washington Irving*, The World Publishing Co., New York, 1944.
- Cash, W.J., *The Mind of the South*, Alfred A. Knopf, New York, 1944.
- Hubbell, Jay B., *The South in American Literature*, Duke Univ. Press, 1954.
- Osterweis, Rollin G., *Romanticism and Nationalism in the Old South*, Yale Univ. Press, New Haven, 1949.
- Parrinton, Vernon L., *Main Currents in American Thought*, 2 vols., Harcourt, Brace, New York, 1927.